卒業生の言葉

校庭の木々も暖かな春の日差しに輝き始める季節となりました。梅から桜へと春のリレーが始まり、その輝きが私たちの人生の輝きを予感させるような今日の佳き日、私たち百九十三名は、この学び舎を巣立ちます。義務教育を終えるこの特別な巣立ちには、大きな世界に立ち向かう覚悟とエネルギーが必要です。突然、毎日登校する日々がなくなり、友達や先生方に会えない非日常を経験し、今日の門出を本当に迎えられるのかという不安が続きました。今こうして私たちの卒業証書授与式を迎えられたことに感謝と喜びで胸がいっぱいです。

先程、校長先生から直接一人一人に手渡していただいた卒業証書を手にし、その重みを感じています。そして、先生方と保護者の方々の温かい眼差しに包まれてこの式場に身を置くことのできる幸せをかみしめています。

三年前、まだ自分の背丈に合わない制服を着て、中学校生活への期待と喜び、そして緊張や不安、様々な感情を抱えながら、私たちはここ上柴中学校の門をくぐりました。初めは、互いのことをよく知らず、会話の少なかった教室は、時が経つにつれ、明るい雰囲気に包まれていきました。先輩方が雲の上の存在に見えた部活動、中学生の厳しさを知った初めての定期テスト。日々の小さな経験を重ね、中学校生活に慣れるとともに上中生としての自覚が芽生えていきました。

幻想的な銀箔の世界に包まれて行われた一年生でのスキー教室。私が転んだ時には、笑顔で手を差し伸べてくれる仲間がいました。このスキー教室で仲間の存在の大切さを実感しました。

「先輩」と呼ばれるようになった二年生での林間学校。友達と声を掛け合いながら全員でゴールしたハイキング、大自然の中、みんなで笑顔になったキャンプファイヤー、仲間と作ったカレーライスの味は忘れません。

そして上中の顔となり、様々なことに「最後」という言葉を意識するようになった三年生。計画から実行までを自分たちで考えて、自由と責任を意識した修学旅行。世界で唯一の原爆被爆国である日本。その地広島を訪れたことは、戦争の悲惨さと平和の尊さを私たち世代が訴えていかなければならない責任を痛感しました。一方、見事に保存されている古都・京都。その素晴らしさに触れ、日本が世界に誇る和の趣を感じました。夜遅くまで友と語り合い、友情を深められたことはよい思い出です。

体育祭。練習も本番も、皆が真剣に取り組み、改めて上中生の団結力の強さを実感することができました。お互いの健闘を讃え合い、認め合うことは、全力を尽くしたからこそ得られたと感じています。私の心は充実感で満たされました。

音楽会では、練習が思うように進まず、クラスに不穏な空気が漂ったこともありました。しかしそれも、担任の先生、実行委員、パートリーダーが中心となってクラスをまとめ、文化会館ではどのクラスも金賞をめざし、すばらしい歌声を響かせることができました。学年合唱では最高学年として恥ずかしくない合唱ができたと思っています。

中学校生活を彩ったのは行事だけではありません。夏は強い日差しのもと、冬は厳しい寒さの中、一日一日を全力で練習し、毎日向き合ってきた部活動。三年間の活動の中で、よい結果を残した人、もっとやっておくべきだったと後悔した人もいました。ただ結果はどうあれ、この三年間の部活動を通して、私たちは何ものにも変えられないものを得ることができました。辛いときに励まし合い、怠けたときには叱咤激励し、よい結果を自分のことのように喜んでくれる仲間。言葉では簡単に言い表せない強い連帯感が、三年間の原動力となりました。

そんな行事や部活動を終えると受験一色になりました。受験直前になると、不安で逃げ出したくなることもたくさんありました。しかし、それでも逃げ出さなかったのは、今まで育み、強くなった仲間との絆やたくさんの方々の支えがあったからです。この受験で、「人は一人では生きられない」という言葉の意

味を実感できました。確かに最後に決断するのは自分です。ただそこに至る過程ではたくさんの人の助けがありました。それは受験だけでなく、中学校生活全般で同じことが言えます。だから、この場をお借りしてその感謝を伝えます。

初めに在校生の皆さん。私たちの晴れの日のために式場を準備してくれてありがとうございます。直接伝えられないことは残念ですが、皆さんには、当たり前のことを大切にしながら生活してほしいと、今だからこそ痛切に感じています。

次にお母さん、お父さん。本当に感謝の気持ちでいっぱいです。毎日美味しいご飯を食べることができ、毎朝洗濯された体育着、ワイシャツが用意され、ぼくにとって家族は、生活、そして心の支えです。今まで迷惑をかけることがたくさんあったでしょう。しかしそれをすべて受け止め、温かく見守り、支えてくれました。そのおかげで私たちは中学校生活で一回りも二回りも成長できました。この先も、私たちにはお父さん、お母さんが必要です。これからもよろしくお願いします。時間がかかっても、今までの恩を親孝行という形で返していき、立派な子どもだと思っていただける大人になります。

そして先生方。私たちがこうして成長することができたのは、先生方の存在があったからです。先生方はいつも私たちを見守り、私たちが困っているときや悩んでいるときは、寄り添って話を聞いてくださいました。また私たちが何か間違いを犯したときは心を鬼にして叱っていただき、物事を成し遂げたときには笑顔で喜んでくださいました。この三年間で教えていただいたことは数え切れません。それらを胸に深く刻み、今日上柴中学校を巣立ちます。今まで本当にありがとうございました。

最後に今まで共に歩んできた仲間へ。毎日この校舎で、顔を合わせて、共に学び、笑い、それがぼくの日常であり、当たり前でした。それが今日あの門を出たらなくなってしまう。「失ってからその大切さに気づく」。この言葉はこういうことを意味するのでしょう。一緒に泣いたり笑ったりするのも今日が最後だと思うとさみしくてたまりません。ぼくはこの学年で、このメンバーで三年間を過ごせたことは最高だったと、胸を張って言えます。本当にありがとう。

私たちは今日、上柴中学校を巣立ち、自ら選んだ新しい道を歩み始めます。もちろん、不安な気持ちがないわけではありません。

できると思っていたことができない。当たり前と思っていたことがそうではない。自然界の脅威の前では、人間の力はあまりにも無力であり、私たちから大切なものを容赦なく奪っていきます。あの東日本大震災の一ヶ月後に小学校に入学し、始まった私たちの義務教育。それを終えようとする今、突然、新型コロナウィルスによって試練を与えられました。この試練は、義務教育を終える私たちへの宿題なのかもしれません。自分の目には見えない、現実感がない事実をしっかりと想像し、迫っている危機を、他人事ではなく当事者として受け止め、適切な行動ができるようになることです。平成から令和へ変わった時代の中でも自分の理想や夢を追い求め、どんな苦境にあっても、あきらめず、助け合ってよりよい未来を築く当事者として全力を尽くしていきます。

結びに、上柴中学校の更なるご発展を祈念し、卒業生の言葉といたします。

令和二年三月十四日　　卒業生代表　　菊池　想弥